

令和4年度

教職課程

自己点検評価報告書

大阪青山大学

令和5年3月

大阪青山大学 教職課程認定学部・学科一覧

- ・子ども教育学部 子ども教育学科
- ・健康科学部 健康栄養学科

大学全体としての全体評価

大阪青山大学は、健康科学部と子ども教育学部の2学部を有しており、健康科学部の中には健康栄養学科と看護学科が設置されている。教職課程については、子ども教育学部子ども教育学科では幼稚園教諭1種免許状、小学校教諭1種免許状の課程を設置しており、健康科学部健康栄養学科においては栄養教諭1種免許状の教職課程を設置している。

本学の教員養成は、建学の精神「高い知性と学識と豊かな情操を兼ね備えた品位ある人材の育成」の理念の下、3ポリシーを適切に定め、地域での活躍が期待される人材の輩出に努めている。そのため、子ども教育学科においては「教育と福祉を中心に据えた教職課程」、健康栄養学科では「管理栄養士課程と一体になった教職課程」をカリキュラムの中心に据えており、さらには、Society-5.0が想定している未来の社会を担う教員養成を行うべく、教職課程の充実・改善に関する不断の見直しを行っている。具体的には、履修カルテ等を活用しながらきめ細やかな個別指導を行い、教員養成上の課題を認識しつつ、それらを教職課程運営委員会や教務委員会を通じて組織的に見直しながら新たなカリキュラムの導入や再編を行っている。

今後の本学の教職課程の継続・発展させる課題として、SDGs教育の導入やICT教育や教員研修の充実などがあげられる。特に、教員研修については、教員免許状更新講習制度が取りやめられた状況下で、本学が自主的に取り組み始めたものである。卒業生のみならず近隣地域の学校教員の参加もあることから、非常にニーズの高い優れた取り組みであり、さらなる発展を期待しているところである。

これらは、教育職員に係わる職業にますます必要とされる人間性豊かな人材の育成に合致するものであると考える。したがって、本報告書の各基準領域に記載されている自己評価結果にもあるように、本学の教職課程の運営は適切に行われていると判断できる。

大阪青山大学
学長 篠原 厚

令和4年度

教職課程

自己点検評価報告書

令和5年3月

大阪青山大学

子ども教育学部・健康科学部

目次

| | | |
|-----|-------------------------------------|----|
| I | 教職課程の現状及び特色 | 2 |
| II | 基準領域ごとの自己点検評価 | 9 |
| | 基準領域 1 教職課程に関わる教職員の共通理解に基づく協働的な取り組み | 9 |
| | 基準領域 2 学生の確保・育成・キャリア支援 | 11 |
| | 基準領域 3 適切な教職課程カリキュラム | 15 |
| III | 総合評価 | 19 |
| IV | 現状基礎データ一覧 | 21 |

I 教職課程の現状及び特色

1 現状

(1) 大学名：大阪青山大学

子ども教育学部 子ども教育学科（小学校教諭一種、幼稚園教諭一種）

健康科学部 健康栄養学科（栄養教諭一種）

(2) 所在地：大阪府箕面市新稲 2 丁目 11 番 1 号

(3) 学生数及び教員数（令和 4 年 5 月 1 日現在）

学生数（小学校教諭一種、幼稚園教諭一種）：251 名／学部 251 名

学生数（栄養教諭一種）：19 名／健康栄養学科 264 名

教員数（教職課程科目）重複あり

小学校教諭 専任 14 名 兼担 3 名 兼任 6 名

幼稚園教諭 専任 16 名 兼担 3 名 兼任 8 名

栄養教諭 専任 4 名 兼担 5 名 兼任 1 名

2 特色

<建学の精神・使命・目的及び教育目標>

大阪青山学園（以下、本学園）の建学の精神は「高い知性と学識と豊かな情操を兼ね備えた品位ある人材の育成」である。この精神の下、「グローバル化する現代社会にあってわが国の文化と伝統に基づいた感性を磨き、知性、倫理性及び創造性を備えた専門的職業人を育成し、もって地域社会に深く貢献する」ことを大阪青山大学（以下、本学）の使命とし、その使命に基づき、本学では「高い志をもって努力する専門的職業人を育成すること」を教育目的としている。

以上の目的を達成するために、五つの教育目標を掲げている。第一に「自分の進路に自信と誇りをもって臨む人」、第二に「優しい眼差しをもって豊かな人間関係を築ける人」、第三に「日本の文化と伝統を理解し感性と知性を磨く人」、第四に「倫理性と創造性をもって社会の一員として役立つことをめざす人」、第五に「グローバルな視点をもって地域社会に貢献できる人」である。

<教職課程の沿革と理念>

本学、子ども教育学部子ども教育学科においては「小学校教諭一種課程」「幼稚園教諭一種課程」、健康科学部健康栄養学科においては「栄養教諭一種課程」の教職課程をそれぞれ設置している。これらの教職課程設置に関する沿革は次の通りである。

本学園は、大阪府の北摂地域¹に位置する大阪青山大学（大阪府箕面市）および青山幼稚園（大阪府吹田市）を擁する教育機関である。

昭和 42（1967）年、学校法人大阪青山学園が認可され、大阪青山女子短期大学（家政科、幼児教育科）を開学し、家政科に中学校教諭二種免許状（家庭）、幼児教育科に幼稚園教諭二種免許状の課程認定を受けた。また、同年、学校法人箕面学園所管の青山幼稚園を学校法人大阪青山学園に移管することが大阪府より許可された。

翌年の昭和 43（1968）年には、幼児教育科が保母養成施設として指定された。当時は北摂地域唯一の幼稚園教諭二種免許状課程及び保育士養成校であった。

さらに、昭和 56（1981）年の国文科設置時に中学校二種免許状（国語）、昭和 61（1986）年の英米語科設置時には中学校教諭二種免許状（英語）の課程認定を受けている（短期大学については令和 4（2022）年に廃止）。

その後、本学の建学の精神をより具現化すべく、「心と身体の健康を科学的に学究し、人々の健康の増進と子どもの健やかな成長を支えることに貢献し、豊かな教養を備えた専門的職業人の育成を行う」ことを目的に平成 17（2005）年、大阪青山大学健康科学部健康栄養学科（管理栄養士養成課程）を開学した。

その目的は、食生活を取り巻く社会環境が大きく変化し、食生活の多様化が進み食と健康への関心が高まってきたことにあった。同時に、「孤食」「個食」「濃食」「粉食」「固食」などといった子どもの食生活の乱れが指摘されるようになり、子どもが将来にわたって健康に生活していけるよう、栄養や食事のとり方について正しい知識に基づいて自ら判断し、食をコントロールしていく「食の自己管理能力」や「望ましい食習慣」を子どもたちに身につけさせることが必要とされ、平成 17（2005）年度には、食に関する指導（学校における食育）の推進に中核的な役割を担う「栄養教諭」制度が創設、施行された。これに伴い、健康栄養学科では、平成 18（2006）年、栄養教諭一種免許状の課程認定を受けた。

平成 20（2008）年には、「1. 子どもの健康な発育に関連する分野を広く研究し、地域社会に貢献する。2. 子どもの健康な発育及び保育・教育に関する専門知識を生かしながら、深い愛情と高い技能を持って主体的に保育・教育の課題を発見し、解決していく人材を養成する」ことを目的として、「健康こども学科」を設置した。「健康こども学科」設置当初は、幼稚園教諭一種免許状課程及び保育士養成課程のみであったが、より多くの地域の子どもの健やかな成長・発達を支えることのできる人材養成に幅を持たせるため、平成 22（2010）年には小学校教諭一種免許状課程を設け、平成 25（2013）年に「子ども教育学科」へと名称を変更した。

「子ども教育学科」設置以降、子ども・家庭を巡る社会的諸問題は複雑・多様化し続けている。複雑・多様化された子ども・家庭に関する諸問題には、グローバル化への対応や

¹ 北摂地域とは、豊能地域（豊中市・池田市・箕面市・能勢町・豊能町）と三島地域（吹田市・高槻市・茨木市・摂津市・島本町）の 7 市 3 町のことである。本学の所在地は、このうちの箕面市にある。箕面市については、高齢者の増加と共に、年少人口（15 歳未満）がここ数年増加し続けていることが特徴的である。

子どもの貧困問題、さらには被虐待児童や発達障害児への理解・支援などがあげられる。特に、これまで福祉の領域とされてきた子ども・家庭を巡る貧困問題や被虐待児童の問題、発達障がい児への理解・支援については、学校教育の場でもその対応を余儀なくされ、昨今の健やかな子どもの成長・発達を支援していくためには、教育と福祉の接続、連携、協働は必要不可欠となっている。それゆえ、これからの教育の現場において、「教育と福祉の連携」に関する高度な専門的知識を有する総合的実践力のある人材育成を行うことを目的とし、令和 4（2022）年度より「子ども教育学科」を「健康科学部」から「子ども教育学部」へと改組した。

＜教職課程の特色＞

＜子ども教育学部 子ども教育学科＞

前述の通り、「子ども教育学部子ども教育学科」では「教育と福祉の連携」に関する高度な専門的知識を有する総合的実践力のある人材育成を行うことを目的としている。「教育と福祉の連携」については、保育所、幼稚園、認定こども園、学校等と障がい児通所支援事業所等との相互理解の促進や保護者も含めた情報共有の必要性が指摘されているところであり、各地方自治体において、教育委員会や福祉部局の主導のもと、支援が必要な子どもやその保護者が、乳幼児期から学齢期、社会参加に至るまで、地域で切れ目ない支援が受けられる支援体制の整備が求められている。こうした課題を踏まえ、本学の教育課程においては、「教育と福祉」を基幹的科目として位置付け、「社会福祉」「社会的養護」など“子どもの福祉”に深く関係する科目を卒業必修科目として配している。また、教育職においては、子どもの心・身体・生活の健康を支える職務上の役割があることを踏まえ「健康子ども学Ⅰ」や「健康心理学」などについても卒業必修科目とし、教育と福祉における包括的な専門知識及び総合的な実践力を有した人材育成のためのカリキュラム構成となっている。つまり、本学の教職課程では、「教育と福祉」を中心に据えたカリキュラム構成によって「専門的職業人」の養成という本学の機能をより強化し、特色付けているのである。このことは、自主的な大学の機能別分化の提唱に対する本学なりの内部的な応答でもある。

なお、「教育と福祉の連携・結合」を視野におく大学は、現在のところ北摂地域には存在しておらず、その独自性は認められるところである。

＜健康科学部 健康栄養学科＞

健康栄養学科では管理栄養士課程を軸に、栄養教諭に必要なカリキュラムを配している。

管理栄養士の活躍の場としては、医療施設、保健所、学校、福祉施設、企業など多岐にわたる。それぞれの現場では、専門知識に加えて、コミュニケーション力が必要である。そのため、1年次では基礎教育科目として、管理栄養士に求められるコミュニケーション力の基礎となることばの力、人間理解などの基礎力を養成する科目を配している。さらに、伝統文化などについても学び、豊かな教養や感性を養うための科目も配している。

専門教育科目では、人間栄養学の実践指導者となるために、「社会・環境と健康」、「人体や疾病」、「食べ物と健康」、「栄養学の諸分野」、「給食経営管理」、「栄養教育論」等について段階的に学び、管理栄養士として、また、栄養教諭として必要な知識と技術を習得する。

特に、調理実習に力を入れ、調理技術の理解と習得を重視している。身体を健やかにし、栄養指導の対象者に寄り添いながら、美味しく心も幸せにする献立を提案できる、子どもから高齢者まで適切に対応できる管理栄養士を輩出するという目的を持って教育を実施している。

こうした健康栄養学科の特色の上に、栄養教諭課程を設置している。そのため、1年次では、管理栄養士の職域分野とその業務内容を理解し、その分野に進む自覚を深めることをめざすキャリアデザイン系の科目を配している。その上で現場で活躍する栄養教諭を招いての講義を実施し、栄養教諭の職務への理解を図っている。2年次以降については、栄養教諭の職務は、食に関する指導と学校給食の管理であることを踏まえ、給食管理に関する内容を専門教育科目の中で指導している。特に、「応用栄養学」ではライフステージ別の栄養管理についても学び、「栄養教育論」では栄養教育、栄養カウンセリングについて実践的に学んでいる。また、「コース特別活動」では、食育について学ぶ機会を設け、食育ボランティア等への参加や、附属幼稚園の子どもたちを対象にしたテーブルマナー研修を学生自らが担当している。「給食経営管理」の臨地実習では、保育所などの食育にかかわる事業所実習があり、「公衆栄養学」の臨地実習でも、食育活動に参加する機会を設けている。

栄養教諭課程の教職専門科目では、栄養に係る教育のみならず、教育の指導の方法や教育実践に係る「道德教育の指導」「総合的な学習の時間」等の内容及び「生徒・進路指導論」「教育相談」等を配しており、栄養教諭として必要な知識、技能、資質については栄養教育の実務経験を持つ教員が、健康栄養学科の専任教員として指導に当たっている。

このように、管理栄養士養成課程と教職課程が一体となって、栄養教育課程の教育に取り組んでいる。

<教育目標>

<子ども教育学部 子ども教育学科>

幼稚園教諭一種・小学校教諭一種の教職課程では、教育学、保育学、発達・健康科学を中心に据えたカリキュラムとなっている。それぞれの教職課程において、「生徒・進路指導論」「特別活動の実際」「特別支援」「食育論」等を教職課程の必修科目とし、子どもの育ちを包括的に支え地域社会での活躍が期待できる教員養成を教育目標にしている。

<健康科学部 健康栄養学科>

栄養教諭の教職課程では人間栄養学の実践指導者としての資質を有し、給食管理と食に関する指導を一体的に展開できる教員養成を教育目標にしている。

<アドミッションポリシー（AP:入学者受け入れ方針）>

上述の教育目標を達成するため、本学教職課程では次のようなアドミッションポリシーを掲げている。

<子ども教育学部 子ども教育学科>

- ① 子どもの心身の成長・発達に関心のある人
- ② 保育・子ども福祉・教育のいずれかに専門職として従事しようと思う人

③ 協調とチャレンジの精神があり、粘り強く学修に取り組める人

このアドミッションポリシーに基づき、本学部では、子ども教育学を学ぶために必要な基礎学力と思考力、対人関係能力、生涯にわたって教育・保育を学び続ける熱意ある人材を受け入れるように努めている。

〈健康科学部 健康栄養学科〉

健康栄養学科としては、次のような人材を受け入れるように努めている。

- ・食（食物と栄養）と健康に興味を持ち、この分野の知識と技術を修得するための強い目的意識を持って学修をやり通せる人
- ・管理栄養士の資格を取り、社会に貢献し、活躍したい人
- ・学修に必要な化学および生物の基礎学力を持っている人

〈カリキュラムポリシー（CP:教育課程編成・実施の方針）〉

本学では「高い知性と学識と豊かな情操を兼ね備えた品位ある人材の育成」という建学の精神に基づき、以下のようなカリキュラムポリシーと学位授与の方針を設けている。

〈子ども教育学部 子ども教育学科〉

建学の精神に基づき、地域社会に深く貢献することは勿論のこと、「教育と福祉の連携・結合」を視座においた、子どもの健やかな未来を創造していく上で不可欠である心身の成長・発達を支えることのできる専門的職業人としての教育者・保育者の育成を目的としている。そのため、本学部が定めたカリキュラムポリシーに則り、所定の単位と能力を修得した者に対して、子ども教育学士の学位を授与する。

子ども教育学科のカリキュラムポリシーは次の通りである。

子どもの心身の成長・発達を支えることのできる保育者・教育者の育成をめざして、基礎教育科目・専門基礎科目・専門教育科目の配置の下に、以下の学修と保育士の資格取得ならびに幼稚園教諭・小学校教諭の免許取得を結合したカリキュラムとする。

- ①実践的な科目と理論的な科目をバランスよく配したカリキュラムを編成する。また、学習形態に少人数のグループ学習や主体的・対話的学習を取り入れ、深い学びを実現するとともに、社会で必要とされる対人関係のスキルの向上も図る。
- ②1年次は、初年次教育として、大学での学び方やキャリア意識の形成、学びに最低限必要なレベルの読む・書く・聞く・伝える能力の育成を図る。また、2年次以降の履修コース（初等教育コース・保育コース・子ども福祉コース）の選択に資する科目も配する。
- ③2、3年次は、保育・幼児教育と子ども福祉の基礎理論や技能あるいは小学校の教科・教育法に関する科目などを配し、履修コースの特質に応じた理論知・実践知の育成を図る。また、実習を通して、理論知・実践知の検証と更新、ならびに大学内だけでは修得できない保育者・教育者に必要な資質・能力の育成を図る。
- ④3年次後期から4年次にかけては、初等教育・保育・子ども福祉に関わる独自の課題を設定・追究し、論文としてまとめることによって、自ら考えて問題を解決できる能力を育てるとともに、自分なりの子ども観・保育観・教育観の確立を図る。最終的には、保育者・教育者としての資質・能力の確認を行う。

- ⑤とくに音楽に関しては、保育・教育では必須となるため、1年次の基礎音楽にはじまり器楽や声楽など4年次までの各学期に、必ず音楽科目を配す。
- ⑥以上の学びに加えて、学生の幅広い関心に合わせて、柔軟に学ぶことができるカリキュラム構成とする。

〈健康科学部〉

専門的職業人となるに必要な基本的要件である本学の教育目標を達成しつつ、各々の分野にふさわしい知識・技能・態度と感性を養い、専門的知識や技能を修得するためのカリキュラム（教育課程）を編成している。

〈健康栄養学科〉

管理栄養士としての資質を身につけ、人間栄養学の実践指導者を養成するカリキュラムを編成する。そのために、広い視野と基礎力を養う基礎教育科目、栄養学を基軸とした専門教育科目（専門基礎分野・専門分野）を配する。

[基礎・教養教育]

- 1年次には、基礎教育科目において広い視野と基礎力を養うとともに、専門教育科目のうち専門基礎分野の科目を配して専門教育の基礎固めを図る。基礎教育科目においては、キャリアデザイン科目を配し、管理栄養士の職域分野とその業務内容の理解によりその分野に進む自覚を深めることを目指す。管理栄養士に求められるカウンセリングスキル、コミュニケーション力の基礎となる良好な対人関係の形成、ことばの力、人間理解などの基礎力を養成する科目を配する。また、高等学校までの学修を補充発展させる科目やIT活用能力を育成するための科目を配し、専門教育科目への導入を図る。

[専門基礎教育]

- 1、2、3年次には、専門教育科目（専門基礎分野・専門分野）を段階的に配し、管理栄養士としての専門知識・技術を修得する。とくに人間栄養学の実践指導者となるために必要な調理の技術を理解し修得することも重要視している。また、3年次には「臨地実習」を配し、事業所給食現場、保健所、病院において、学内で学修した知識・技術を基に、学内だけでは修得できない栄養学の実践実習を行う。

[専門教育]

- 3、4年次には、卒業研究を必修科目とし、実験・調査等の研究活動を通して栄養と食のあり方を科学的・客観的に評価できる専門職としての資質を高める。
- 4年次には、専門分野を横断して、栄養評価や管理が行える総合的な能力を養い、管理栄養士としての資質を備えるため、「総合演習」を配し、能力の向上を図る。
- 資格の取得を円滑に図るためにキャリア形成を支援するカリキュラムを設定している。卒業と同時に「管理栄養士国家試験受験資格」「栄養士」を取得する。

[資格関連教育]

- 管理栄養士としての実践の場を幅広くするために、「栄養教諭一種免許状」「食品衛生監視員」「食品衛生管理者」「NR・サプリメントアドバイザー」「フードスペシャリスト」「フードサイエンティスト」「健康運動実践指導者」などの資格を取得することも

できるカリキュラムとする。

<ディプロマポリシー（DP:卒業認定・学位授与の方針）>

<子ども教育学部>

所定の単位と能力を修得し、伝統を重んじる感性と調和のある豊かな心を養い、身に付けた専門的職業人としての知識と技能を生かして誇りをもって社会に貢献しようとする学生は、卒業が認定され学位が授与される。

<子ども教育学科>

- ①子どもに対する愛情をもち、深い子ども理解と専門的知識を有すること。
- ②初等教育・保育・子ども福祉の実践に必要な資質・能力を有すること。
- ③自ら課題を見つけ、主体的に問題解決に当たる省察力を有すること。
- ④初等教育・保育・子ども福祉にたずさわる専門的職業人としての高い倫理観と使命感を有すること。

<健康科学部>

所定の単位と能力を修得し、伝統を重んじる感性と調和のある豊かな心を養い、身に付けた専門的職業人としての知識と技能を生かして誇りをもって社会に貢献しようとする学生は、卒業が認定され学位が授与される。

<健康栄養学科>

[知識・技術]

- 「人間栄養学」（広い視点から人に向かい合い、社会を見つめ、食・栄養の問題はもとより食糧の生産・流通・分配、また経済と社会の問題までをも含めて体系化していく栄養学）を実践する素養を有している。
- 人々の健康の維持・増進、ならびに生活の質を高めるための栄養・食事指導ができる。

[態度・意欲]

- 職業人として豊かな人間関係を作り、多様な職種の人と協調し、チーム医療などにも参画することができる。
- 栄養に関する専門的関心を持ち続け、不断に努力を積み重ねることができる。

II 基準領域ごとの自己点検・評価

基準領域 1 教職課程に関わる教職員の共通理解に基づく協働的な取り組み

基準項目 1-1 教職課程教育に対する目的・目標の共有

<現状説明>

本学の教職課程教育の目的・目標については、アドミッションポリシー、カリキュラムポリシー、ディプロマポリシーの中で触れている。これらの3ポリシーについては、大学ホームページ【資料 1-1-1】、学生募集要項【資料 1-1-2】や学生便覧【資料 1-1-3】に記載し、学生及び教員への周知と理解を図っている。

また、本学のアドミッションポリシーには「高い志をもって努力する専門的職業人を育成すること」ことを掲げている。つまり、本学教職課程教育における「専門的職業人」とは、専門性のある教員養成を意味する。ここでいう専門性とは、小学校教諭一種及び幼稚園教諭一種の養成課程においては「教育と福祉の連携・結合」に関する理論知と実践知を兼ね備え、その上で子どもの心身の成長・発達を支えることのできる教員、栄養教諭一種課程においては人々の健康の維持・増進、ならびに生活の質を高めるための栄養・食事指導のできる教員の育成及び学修成果の共有を行っている。

<長所・特色>

子ども教育学部子ども教育学科では、「教育と福祉の連携・結合」という視点を有し、子どもの心身の成長・発達を支えることのできる教育者の養成を目指している。そのため、4年間の授業全体を通して、理論知と実践知の融合が実現できるように、理論的な科目と実践的な科目をバランスよく配しながら、少人数による丁寧な教育を実践している。

栄養教諭課程においては、人間栄養学の実践指導者としての資質を有し、子どもから高齢者まで適切に対応できる管理栄養士養成課程を土台とし、給食管理と食に関する指導を一体的に展開できる教員養成を目指している。そのため、カリキュラムポリシーに則って4年間バランスよく科目を配しているが、中でも調理技術の理解と習得に力を入れている。

教職課程運営委員会については、教職協働の元、委員会を月に一回のペースで定期的開催し、教育を取り巻く今日的課題の情報共有を図りながら、教職課程に関する不断の見直しを行っている。

<取り組み上の課題>

教育現場における今日的な課題に対応できる教員養成に努めているが、Society5.0に向かうICTの活用技術や指導力のある教員養成、SDGsにおける質の高い教育の実現に向けた教員養成については着手し始めたところである。これらに関する理論知と実践知の融合が実現できるよう、また、学生の主体的な学びが実現できるよう、カリキュラムの配当時期や授業内容の見直しが課題である。

<根拠となる資料・データ>

- 資料 1-1-1：大阪青山大学公式ホームページ（3つの方針）
(URL) <https://www.osaka-aoyama.ac.jp/guide/policy/>
- 資料 1-1-2：令和4年度学生募集要項 P.1
- 資料 1-1-3：令和4年度学生便覧 P.7-11

基準項目 1-2 教職課程に関する組織的工夫

<現状説明>

教職課程に関する教員組織については、採用時の段階から、①教育研究業績、学会及び社会における活動、教育研究あるいは実務家教員としての見識、②本学園の建学の精神と教育理念に関する理解等を総合的に考慮している。

小学校教諭一種課程・幼稚園教諭一種課程を有する子ども教育学科においては、教授 7 名、准教授 6 名、講師 2 名の計 15 名で組織されている。そのうち、小学校教諭一種課程においては 14 名、幼稚園教諭一種課程においては 16 名、栄養教諭一種課程においては、4 名の研究者教員と実務家教員（小学校教員 5 名、幼稚園教諭 3 名、栄養教諭 1 名）を配している。さらに、教職課程に跨る組織として、保育・教職支援室を設置している。保育・教職支援室には室長 1 名（教員兼務）と、2 名の専任事務職員を配しており、教職協働による教育実習や教員採用試験等に関する支援を行っている。

教職課程を担う教員の FD・SD については、私立大学教職課程主催の研修会への参加、私立幼稚園協会主催の研修会や懇親会等に参加を促し、教職担当教員の資質・能力の向上に努めている。

<長所・特色>

全学的な教職課程の運営に関しては、教職課程運営委員会【資料 1-2-1】を組織している。また、当該委員会の下部組織として教育実習専門部会【資料 1-2-2】、教員養成等連絡協議会【資料 1-2-3】を設け、教職課程に関する実習や採用試験に関する課題等についての情報の共有を図っている。特に、教員養成等連絡協議会においては、本学が位置する箕面市教育委員会から委員の委嘱を受け、昨今の教育現場における教員養成上の課題や要望等について情報共有を図っている。

また、子ども教育学科においては、実務家教員を中心とした実習委員会を組織しており、小学校教諭一種課程、幼稚園教諭一種課程ごとの小委員会も設けている。学科内の実習委員会においては、各種実習に関する事務手続きや学生指導に関する情報の共有を行うのみならず、実習事前事後に学生の個別課題への指導・助言なども行っている。

栄養教諭一種課程については、栄養教育の実務家教員を中心に、学科教員、学科事務室、保育・教職支援室と連携を図りながら、各種実習に関する事務手続きや実習事前事後に学生の個別課題への指導・助言などを行っている。

その他、教職課程に関する特別教室として、リズム室（体育館）や音楽室、実験（理科）室、保育演習室及び教職実践演習室、集団給食室等、教職に関する実技・演習に対応した施設・設備が整備されている【資料 1-2-4】。令和 3 年度中に設置した教職実践演習室については、GIGA スクール構想の実現を踏まえ、各初等教科教育法や教職実践演習の授業の中で ICT を活用した指導力を身に付けさせるための環境を整備している。

<取り組み上の課題>

教職担当教職員に関する学内での FD・SD 実施については、今後の教職課程運営委員会にて検討し実施しなければならない。

<根拠となる資料データ>

- ・資料 1-2-1：教職課程運営委員会規定
- ・資料 1-2-2：教育実習専門部会規程
- ・資料 1-2-3：教員養成等連絡協議会規程
- ・資料 1-2-4：令和 4 年度学生便覧（校舎図面 P.99-105）

基準領域 2 学生の確保・育成・キャリア支援

基準項目 2-1 教職を担うべき適切な人材（学生）の確保

<現状説明>

本学教職課程における入学者の受け入れ方針については、先に記したアドミッションポリシーの通りである。このアドミッションポリシーについては、入学選抜に関する要綱や入試時の面接等において確認している。

〈子ども教育学部 子ども教育学科〉

教育課程の編成及び実施の方針については、先のディプロマポリシーを踏まえ、教育職に関する理論知と実践知の融合が実現できるように、理論的な科目と実践的な科目をバランスよく配し、それらの学びと各自が希望する進路に必要な幼稚園教諭一種課程及び小学校教諭一種課程の免許取得を結合したカリキュラム構成にしている。

開講されている授業については、定員 80 人を 40 人ずつの 2 クラスに分けて実施している。器楽およびゼミ形式の科目については、4~5 名程度の少人数に分かれての受講を原則としている。

〈健康科学部 健康栄養学科〉

教育課程の編成および実施の方法については、人間栄養学の実践的指導者としての専門的知識や技術を修得した専門的職業人となるためのカリキュラム構成としており、さらに児童・生徒の栄養状態の管理や栄養教育の推進を担う栄養教諭一種免許取得に必要な科目の履修ができるカリキュラムとなっている。

健康栄養学科で開講されている授業については、定員 80 人を 40 人ずつの 2 クラスに分けて実施している。

<長所・特色>

〈子ども教育学部 子ども教育学科〉

1 年次は、初年次教育として、大学での学び方やキャリア意識の形成、学びに最低限必要なレベルの読む・書く・聞く・伝える能力の育成を図るために、基礎教育科目の履修が中心となる。また、2 年次以降の専門的な学びにつなげるための専門基礎科目および履修コース（保育コース・子ども福祉コース・初等教育コース）の選択に資する科目も配している。

2、3 年次は、教育や保育の本質・子どもに関する基礎的理解や教育・保育の内容および指導法に関する科目などを配し、履修コースの特質に応じた理論知・実践知の育成を図る。また、実習を通して、理論知・実践知の検証と更新、ならびに大学内だけでは習得が難しい保育者・教育者に必要な資質・能力の育成を図る。

3 年次後期から 4 年次にかけては、保育・子ども福祉・初等教育に関わる独自の課題を設定・追究し、論文としてまとめることによって、自ら問いを立て、合理的な一定の解決を見出すという社会人に必須の能力を養成するとともに、自分なりの子ども観・保育観・教育観の確立を図る。最終的には、保育者・教育者としての資質・能力の確認を行う。

また、教職課程に学ぶ学生の意欲や適性を把握するために、学期ごとの類型 GPA と入学時からの積算 GPA による学科独自の実習基準を設けている。この実習基準に満たない学生については、担任や実習委員が個別面談・指導を行いながら学習・生活態度の改善を求め、教育職に必要な資質・能力の担保に努めている【資料 2-1-1】。

4 年間の学びを踏まえた履修カルテについては、小学校教諭一種課程・幼稚園教諭一種課程における授業科目修得状況や教職に関する学外実習・ボランティア経験等の状況を記入した上で、教育職に必要な資質・能力についての自己評価を行い、教育職を目指す上で課題と考えられる事項の確認を行っている【資料 2-1-2】。

〈健康科学部 健康栄養学科〉

1 年次には、基礎教育科目において広い視野と基礎力を養うとともに、専門教育科目のうち専門基礎分野の科目を配して専門教育の基礎固めを図る。基礎教育科目においては、キャリアデザイン科目を配し、管理栄養士の職域分野とその業務内容の理解によりその分野に進む自覚を深めることを目指す。管理栄養士に求められるカウンセリングスキル、コミュニケーション力の基礎となる良好な対人関係の形成、ことばの力、人間理解などの基礎力を養成する科目を配する。また、高等学校までの学修を補充発展させる科目や IT 活用能力を育成するための科目を配し、専門教育科目への導入を図る。

1、2、3 年次には、専門教育科目（専門基礎分野・専門分野）を段階的に配し、管理栄養士としての専門知識・技術を修得する。とくに人間栄養学の実践指導者となるために必要な調理の技術を理解し修得することも重要視している。また、3 年次には「臨地実習」を配し、事業所給食現場、保健所、病院において、学内で学修した知識・技術を基に、学内だけでは修得できない栄養学の実践実習を行う。

3、4 年次には卒業研究を必修科目とし、実験・調査等の研究活動を通して栄養と食のあり方を科学的・客観的に評価できる専門職としての資質を高める。

4 年次には、専門分野を横断して、栄養評価や管理が行える総合的な能力を養い、管理栄養士としての資質を備えるため、「総合演習」を配し、能力の向上を図る。資格の取得を円滑に図るためにキャリア形成を支援するカリキュラムを設定している。

また、栄養教諭としての目標、学びの記録と自己評価を、履修カルテに記入させ、学修成果の確認と教職に対する意欲の向上を図っている【資料 2-1-3】。

〈取り組み上の課題〉

学生個人が目指す教師像をより確かなものにしていくために、教育者としてのキャリア形成の初期段階からの丁寧な個別指導を引き続き行っていく。また、現代に求められる教育に関する今日的課題に対応できる教員養成を目指し、授業においてはアクティブラーニングを増やししながら、理論知と実践知の融合を図るための取組課題を組織的に見直していく。

〈根拠となる資料データ〉

- ・資料 2-1-1：保育・教育実習ハンドブック（子ども教育学科）
- ・資料 2-1-2：履修カルテ（子ども教育学科）様式
- ・資料 2-1-3：履修カルテ（健康栄養学科）様式

基準項目 2-2 教職へのキャリア支援

〈現状説明〉

本学では、各学科・全学年に担任制を採用し、学修・学生生活・キャリア形成への支援を行う体制を構築している。また、それぞれの教員養成課程において複数名の実習委員や就職委員を置き、実習課題や個人の将来展望に応じた個別指導を行い社会的・職業的自立の適正化を図っている。

〈長所・特色〉

〈子ども教育学部 子ども教育学科〉

保育・教職支援室において、教員採用試験対策として単位認定外科目「保育・教職応用演習」を設け、教職教養や面接・模擬授業などの指導を行っている。この保育・教職支援室では教育委員会や小学校・園と連携し、小学校などの教育現場との接点を持つ機会を設け、教育者としての自覚を高める契機となる教育ボランティア活動やスクールサポーター

を推奨しており、学生の経験内容に応じ全教員が適宜指導・助言を行っている。キャリア支援を充実させるため、本学ではキャリアガイダンスの改善・向上方策として次のような取り組みを行っている。単位認定外の「特別時間」を本学のヒドゥンカリキュラムと位置付け、入学直後の1年次から卒業に至るまでの間、担任と保育・教職支援室が連携し教育職のためのキャリア支援を行う。また、エンロールメントの一環として、卒業生を対象とした支援にも重点を置き、卒業後の採用試験対策や採用先とのミスマッチ等による早期離職者に対しての再就職相談や求人紹介の支援も行っている（次頁図参照）。さらに、夏期休業中を活用し、教育・保育専門職者のキャリア形成を支援するための教員研修を自主的に開催し、卒後キャリア支援を行っている。尚、本研修会について卒業生のみならず本学が連携する三市（箕面市・池田市・川西市）の現職の教育職従事者も受講できるようになっている。【資料 2-2-1】

〈健康科学部 健康栄養学科〉

1年次より、管理栄養士の職域分野とその業務内容を理解し、その分野に進む自覚を深めることをめざすキャリアデザイン系の科目を配している。その上で、学年指導の時間「特別時間」で、栄養教諭の意義や職務内容、履修について説明を行うと同時に、現場で活躍する栄養教諭を招いての講義を実施、栄養教諭の職務への理解を図っている。2年次以降については、栄養教諭の職務が「学校給食の管理」と「食に関する指導」であることを踏まえ、給食経営管理に関する講義と実習の中で給食管理の実践力を養っている。さらに、「応用栄養学」ではライフステージ別の栄養管理について学び、「栄養教育論」では栄養教育、栄養カウンセリングについても実践的に学んでいる。また、「コース特別活動」では、食育について学ぶ機会を設け、食育ボランティア等への参加や、附属幼稚園の子どもたちを対象にしたテーブルマナー研修を学生自らが担当している。「給食経営管理」の臨地実習では、学外の給食施設での実習を実施しているが、実習先には保育所などの食育にかかわる事業所もあり、学生が給食経営管理に加えて、食育現場を経験する機会も設けられている。また、「公衆栄養学」の臨地実習では、保健所での実習を実施し、地域に対する公衆栄養活動の一環として、食育活動に参加する機会もある。

教職専門科目では、「教職実践演習」で教育実習の振り返りにより教職キャリア形成の支援を行っている。また、現職栄養教諭の在籍校に出向いて授業を見学し、実際の職務内容として学びの機会を設けている。学内では、保育・教職支援室と健康栄養学科事務室、担当教員が連携し、教員採用試験対策や採用情報、教育実習について情報の共有を行っている。

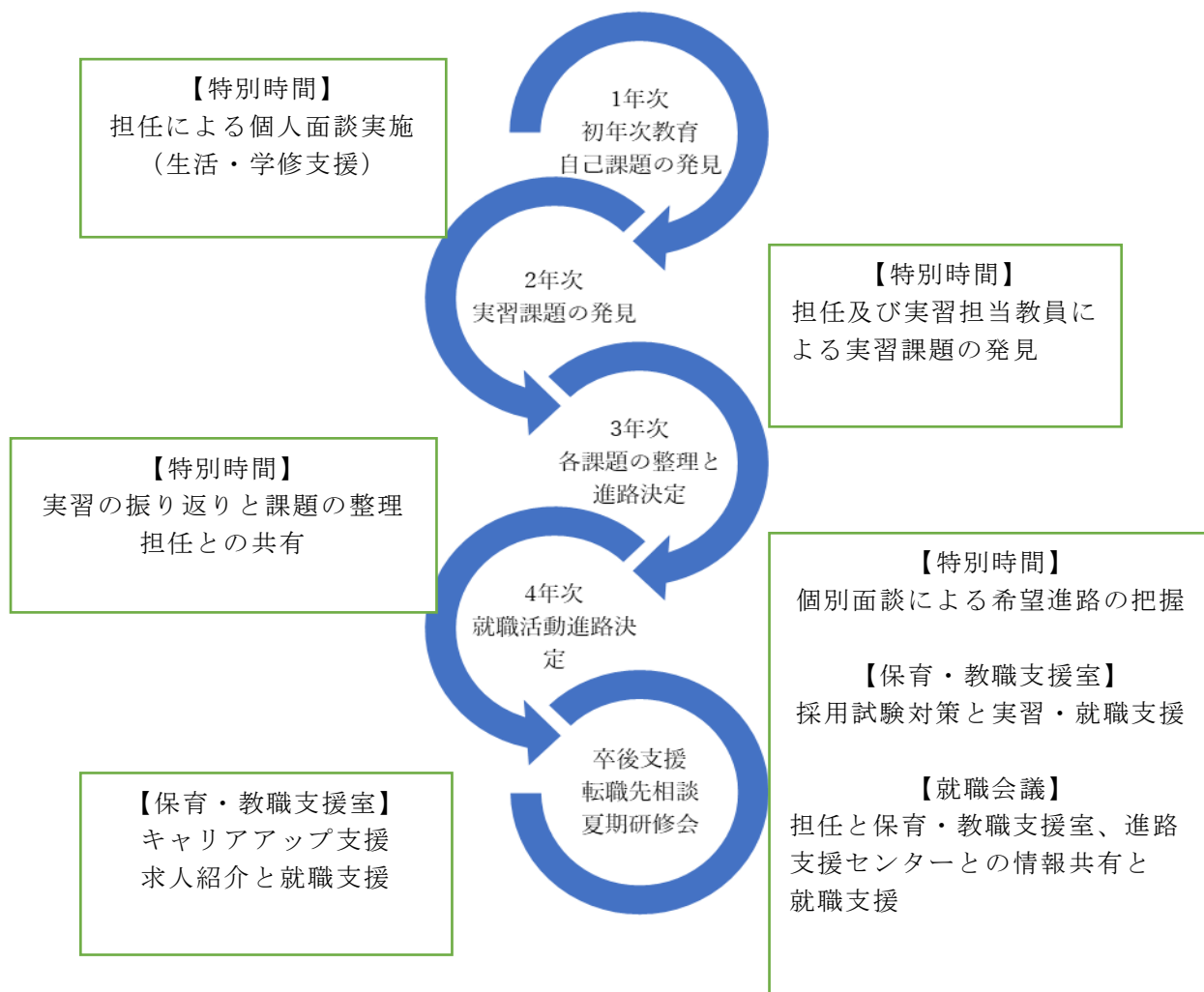
〈取り組み上の課題〉

〈子ども教育学部 子ども教育学科〉〈健康科学部 健康栄養学科〉

リカレント教育の一環として開催した子ども教育学部主催の教員研修会について、案内時期・方法を検討する必要がある。今年度は第1回目ということもあり、案内時期の遅れなど準備段階における課題が生じた。そのため、研修会参加者アンケートの結果も踏まえ、次年度からは早期に学科と各部署間が連携をとり、準備を進めていくことが求められる。

〈根拠となる資料データ〉

- ・資料 2-2-1：教職研修会要項



子ども教育学部におけるエンロールマネジメントのイメージの概略図

基準領域 3 適切な教職課程カリキュラム

基準項目 3-1 教職課程カリキュラムの編成・実施

<現状説明>

教職課程履修においては、学年進行に伴う適切な教職課程カリキュラムを配している。また、教育者としての自覚を持ち教育実習に臨むための履修要件を以下のように設けている。

〈子ども教育学部 子ども教育学科〉

(履修要件等について)【資料 3-1-1】

- 1) 教育実習Ⅰを履修するための要件
1年次の単位履修状況及び出席、授業態度、提出物等の状況が良好であること。
- 2) 教育実習Ⅱを履修するための要件
GPAに基づく成績評価において一定の基準を満たすこと。(保育・教育実習ハンドブック P6 参照)

〈健康科学部 健康栄養学科〉

(履修要件等について)【資料 3-1-5】

- 1) 3年次における履修制限
2年次終了時における修得総単位数が60単位数に満たないものは、3年次における履修登録科目及び単位数に制限を設けるとともに、「卒業研究」に係る要件を設定する。
- 2) 「学校栄養教育概論」を修得(見込を含む)していなければ、「学校栄養教育指導論」「栄養教育事前事後指導」「栄養教育実習」「教職実践演習」を履修することはできない。
- 3) 教育実習を履修するための要件
「教職に関する科目」「栄養にかかる教育に関する科目」「栄養教育実習事前指導」が履修済みであること。

<長所・特色>

〈子ども教育学部 子ども教育学科〉

前述の通り、「子ども教育学部子ども教育学科」では「教育と福祉の連携」に関する高度な専門的知識を有する総合的実践力のある人材育成を行うことを目的としている。「教育と福祉の連携」については、保育所、幼稚園、認定こども園、学校等と障がい児通所支援事業所等との相互理解の促進や保護者も含めた情報共有の必要性が指摘されているところであり、各地方自治体において、教育委員会や福祉部局の主導のもと、支援が必要な子どもやその保護者が、乳幼児期から学齢期、社会参加に至るまで、地域で切れ目ない支援が受けられる支援体制の整備が求められている。こうした課題を踏まえ、本学の教育課程においては、「教育と福祉」を基幹的科目として位置付け、「社会福祉」「社会的養護」など“子どもの福祉”に深く関係する科目を卒業必修科目として配している。また、教育職においては、子どもの心・身体・生活の健康を支える職務上の役割があることを踏まえ「健康子ども学Ⅰ」や「健康心理学」などについても卒業必修科目とし、教育と福祉における包括的な専門知識及び総合的な実践力を有した人材育成のためのカリキュラム構成となっている。つまり、本学の教職課程では、「教育と福祉」を中心に据えたカリキュラム構成によって「専門的職業人」の育成という本学の機能をより一層強化し、特色付けているのである。このことは、自主的な大学の機能別分化の提唱に対する本学なりの内部的な応答でもある。

なお、「教育と福祉の連携・結合」を視野におく大学は、現在のところ北摂地域には存在しておらず、その独自性は認められるところである。

カリキュラムの編成にあたっては、教育上の目的・目標を踏まえて、いわゆる「教科専門」「教科指導」「教職専門」の各科目領域、各科目間の系統性を確保するとともに、教職課程コアカリキュラムに対応を図っている。【資料 3-1-2】

また、令和2(2020)年度から完全実施された新しい学習指導要領(幼稚園教育要領は

平成 30 (2018) 年度から実施) では、「何がわかったか」「何ができるようになったか」を意識し、子どもの「主体的・対話的で深い学び」を引き出す指導力の育成が求められている。このような学校現場や社会のニーズ、現下の政策課題等を踏まえて科目を編成することにも留意している。

教職課程シラバスの作成にあたっては、各授業科目の目的と到達目標、その目標を達成するための学修内容と方法、計画、成績評価基準、事前学修と事後学修の内容等を明確に記載している。【資料 3-1-3】

「教職実践演習」は、教職課程の履修、教職課程外での多様な活動を通じて学生が修得した資質能力が教職に必要な資質・能力として形成されたかを、その目的・目標に照らして最終的に確認することを目的としている。小学校教諭、幼稚園教諭一種課程で「子どもや教職員のヘルスケア」「保護者対応のあり方」「教員の服務規程」などを取り上げ、より実践的な指導力の育成を図っている。

また、「履修カルテ」を用いて、学生が履修状況や学修成果を把握し、学修意欲を高めることができるようにしている。さらに、教員も学生の履修状況を把握して、それに応じたきめ細やかな教職指導を行っている。

「教育実習」は、教職課程担当者と実習校の関係者が連携して、事前指導・事後指導を含め、大学の主体的な関与の下で適切に行っている。また、教育実習を行う上で必要な履修要件を設定し、教育実習を実りあるものにするよう指導している。【資料 3-1-4】

〈健康栄養学科〉

前述の通り、教職課程は専門教育科目であり、栄養教育の基礎は専門科目(「栄養教育論」「応用栄養学」、ライフステージに応じた栄養管理指導)で実施している。また、オリエンテーション時の履修指導、特別時間で資格取得についての説明を行い、「管理栄養士入門」「コース特別活動」、食育ボランティア等の授業内で栄養教諭の職務について概説を行っている。

健康栄養学科ではこれら管理栄養士課程を軸に、栄養教諭に必要な、給食の管理と食に関する指導両面の実践力を養成するカリキュラムを配している。

管理栄養士の活躍の場としては、医療施設、保健所、学校、福祉施設、企業など多岐にわたる。それぞれの現場では、専門知識に加えて、コミュニケーション力が必要である。そのため、1 年次では基礎教育科目として、管理栄養士に求められるコミュニケーション力の基礎となることばの力、人間理解などの基礎力を養成する科目を配している。さらに、伝統文化などについても学び、豊かな教養や感性を養うための科目も配している。

専門教育科目では、人間栄養学の実践指導者となるために、社会・環境と健康、人体や疾病、食べ物と健康、栄養学の諸分野、給食経営管理、栄養教育論等について段階的に学び、管理栄養士として、また、栄養教諭として必要な知識と技術を習得する。特に、「調理実習」に力を入れ、調理技術の理解と習得を重視している。身体を健やかにし、栄養指導の対象者に寄り添いながら、美味しく心も幸せにする献立を提案できる、子どもから高齢者まで適切に対応できる管理栄養士を輩出するという目的を持って教育を実施している。

こうした健康栄養学科の特色の上に、栄養教諭課程を設置している。そのため、1 年次では、管理栄養士の職域分野とその業務内容を理解し、その分野に進む自覚を深めることをめざすキャリアデザイン系の科目を配し、その上で現場において活躍する栄養教諭を招いての講義を実施し、栄養教諭の職務への理解を図っている。2 年次以降については、栄養教諭の職務は、食に関する指導と学校給食の管理であることを踏まえ、給食管理に関する内容を専門教育科目の中で指導している。特に、「応用栄養学」ではライフステージ別の栄養管理についても学び、「栄養教育論」では栄養教育、栄養カウンセリングについて実践的に学んでいる。また、「コース特別活動」では、食育について学ぶ機会を設け、食育ボランティア等への参加や、附属幼稚園の子どもたちを対象にしたテーブルマナー研修を学生自らが担当している。給食経営管理の臨地実習では、保育所などの食育にかかわる事業所実習があり、公衆栄養学の臨地実習でも、食育活動に参加する機会を設けている。

栄養教諭課程の教職専門科目では、栄養に係る教育のみならず、教育の基礎的理解、道徳・総合的な学習の時間等の内容及び生徒指導、教育相談等、教育実践について学び、栄養教諭として必要な知識、技能、資質については栄養教育の実務経験を持つ教員が、健康栄養学科の専任教員として指導に当たっている。【資料 3-1-6】

このように、管理栄養士養成課程と教職課程が一体となって、栄養教育課程の教育に取り組んでいる。

<取り組み上の課題>

本学各教職課程においては GIGA スクール構想に伴い、ICT 機器を活用し、情報活用能力を育てる教育に対応するため、情報機器に関する科目や教科指導科目等を新たに設けたところであるが、ICT を活用する能力を育てる指導力の育成も喫緊の課題である。

<根拠となる資料・データ等>

<子ども教育学部 子ども教育学科>

- ・資料 3-1-1：令和 4 年度学生便覧 P. 40
- ・資料 3-1-2：令和 4 年度学生便覧 P. 64～75
- ・資料 3-1-3：大阪青山大学公式ホームページ（シラバス）
(URL) <https://www.osaka-aoyama.ac.jp/syllabus/>
- ・資料 3-1-4：保育・教育実習ハンドブック P. 6

<健康栄養学科>

- ・資料 3-1-5：令和 4 年度学生便覧 P. 39
- ・資料 3-1-6：令和 4 年度学生便覧 P. 45～51

基準項目 3-2 実践的指導力養成と地域との連携

<現状説明>

<子ども教育学部 子ども教育学科>

本学のディプロマポリシーに則して、取得する教員免許状の特性に応じた実践的指導力を育成する機会を教職実践演習だけでなく各実習の事前・事後指導をはじめ、各保育内容や教科教育法の中においても演習や模擬保育・模擬授業を取り入れながら実践力を育成する機会を設けている。

小学校、幼稚園とも実習委員会を設置し、実習がより良いものとなるように実習校・園と連携を図りながら、適宜情報の共有や学生指導を行っている【資料 3-2-1】。

教育委員会等との連携協力体制については、大学の所在する箕面市と「教員養成等連絡協議会」を定期的に開催し、本学の教育実習の方針や実態、教育委員会の策定する教員育成指導との関係性について情報交換し、連携した取り組みを実施している。

<健康科学部 健康栄養学科>

本学の栄養教諭課程は、ディプロマポリシーに則し、管理栄養士養成課程での学びを基本としている。その上で、栄養教諭の職務は、「給食の管理」と「食に関する指導」にあるとし、「学校栄養教育概論」「学校栄養教育指導論」等の専門科目を配している。その中で、地域との連携を図りながら、栄養教諭としての実践力を培っている。

<長所・特色>

<子ども教育学部 子ども教育学科>

保育・教職支援室を中心に、介護等体験、ボランティアなど、様々な体験活動とその振り返りの機会を設けている。振り返りの場では、学内の教員や保育・教職支援室のスタッフとの面談を設定している。さらに教育職の実習および就職に関してもフォローしており、学生の実習及び就職に関する情報を学科として共有することが出来ている。

さらに、「子どもの健康と生活」では、地域の学校長や園長の講話を聴く機会を設け、子どもの実態や学校園の現場における教育実践の最新の事情について学生が理解できるようにしている。

また、大阪府私立幼稚園連盟・兵庫県私立幼稚園連盟の連絡・懇談会に定期的に参加し、実習及び就職について情報交換を通して連携および・協力を行っている。さらに、大学附属の青山幼稚園及び協力園である平野幼稚園とも連携を取りながら、教育実習Ⅰを実施している。

小学校・幼稚園での実習に関しては、保育・教職支援室が窓口となって密に連絡を取るほか、実習訪問担当教員が各実習校・園を適宜訪問し、連携を取りながら学生を指導し、円滑に教育実習が進み、成果が上がるように努めている。

〈健康栄養学科〉

管理栄養士養成課程の専門科目で、栄養教諭の職務の基本となる給食管理と食に関する指導の実践力を養っている。具体的には、給食経営管理の講義では献立作成に関する理論知識を養い、給食提供の実習を通して給食管理の実践知識を養っている。さらに、「応用栄養学」ではライフステージ別の栄養管理の観点から、様々な年齢や状況の対象者に対する献立作成や食の指導について実践的に学んでいる。

「栄養教育論」では実践的な栄養教育や栄養カウンセリングについて学んでいる。

「公衆栄養学」の臨地実習では、保健所での実習を実施し、地域に対する公衆栄養活動の一環として、食育活動に参加する機会も設けている。

「地域栄養活動実習」においては、地域住民などを対象に栄養指導を行ったり、近隣市の健康課題に取り組む活動を学生と共に企画している。また、「コース特別活動」では、食育について学ぶ機会を設け、食育ボランティア等への参加や、附属幼稚園の子どもたちを対象にしたテーブルマナー研修を学生自らが担当している。

「給食経営管理」の臨地実習では、保育所などの食育にかかわる事業所等での学外実習を行い、学生が食育現場を経験する機会を設けている【資料 3-2-2】。

教職専門科目では、「教職実践演習」で教育実習の振り返りにより教職キャリア形成の支援を行い、また、現職栄養教諭の在籍校に出向いて授業を見学し、実際の職務について学んでいる。

〈取り組み上の課題〉

本学は、本学が所在する箕面市と本学に隣接する池田市及び川西市と三市包括連携協定を締結しているが、その取り組みはコロナ禍において滞っている。これらの地域で、本学の卒業生が教員として活躍している現状を鑑み、本学独自の教員研修や現場との交流の在り方についての組織的取り組みを充実させていく。

〈根拠となる資料・データ等〉

〈子ども教育学部 子ども教育学科〉

- ・資料 3-2-1：大阪青山大学公式ホームページ（シラバス）
(URL) <https://www.osaka-aoyama.ac.jp/syllabus/>

〈健康栄養学科〉

- ・資料 3-2-2：大阪青山大学公式ホームページ（シラバス）
(URL) <https://www.osaka-aoyama.ac.jp/syllabus/>

Ⅲ. 総合評価

大阪青山大学では、建学の精神に則り、その使命・目的を果たすため、子ども教育学部 子ども教育学科においては「小学校教諭一種課程」「幼稚園教諭一種課程」、健康科学部健康栄養学科においては「栄養教諭一種課程」の教職課程を設置している。

子ども教育学科では、「教育と福祉の連携・結合」、健康栄養学科では「人間栄養学の実践指導者」を教職課程の目的とし、教育現場における今日的課題に対応できる教員養成に努めている。今後は、Society5.0に向かうICTの活用技術や指導力のある教員養成、SDGsにおけるより質の高い教育の実現に向け、これらに関する理論知と実践知の融合が実現できるよう、また、学生の主体的な学びが実現できるよう、カリキュラムの配当時期や授業内容の見直しが必要であると考えている。

教職課程における組織としては、全てをまとめる「教職課程運営委員会」が組織され、その下部組織として教育実習及び介護等の体験に関することを専門的に審議する「教育実習専門部会」、自治体等との協議機関として箕面市教育委員会から委員の委嘱を含む「教員養成等連絡協議会」を組織している。

学生の確保・育成に関しては、各学科のアドミッションポリシーに基づき、ディプロマポリシーに沿った教育を行っている。そのため、少人数制の受講を原則とし、教育者としてのキャリア形成の初期段階から、きめ細かな丁寧な指導を行っている。今後は、アクティブラーニングを増やししながら、理論知と実践知の融合を図るための取組を組織的に見直していくことが課題である。

また、キャリア支援に関しては、各学科・全学年に担任制を採用し、学修・学生生活・キャリア形成への支援体制を、また、それぞれの教員養成課程において複数名の実習委員や就職委員を置き、実習課題や個人の将来展望に応じた個別指導を行い社会的・職業的自立の適性を図っている。

教職課程カリキュラムに関しては、「教職実践演習」を中心に「子どもや教職員のヘルスケア」「保護者対応のあり方」「教員の服務規程」などを取り上げ、より実践的な指導力の育成を図っている。また、「履修カルテ」に基づく学修の振り返りを行っている。教育実習については、履修要件を設けている。今後は、GIGAスクール構想に伴い、情報機器に関する科目や教科指導科目等を新たに設けたが、ICTを活用する能力育てる指導力の育成が喫緊の課題である。

地域連携については、子ども教育学科では、「子どもの健康と生活」において、子どもの実態や現場における最新の事情を、地域の学校長や園長の講話を聴く機会を設けている。また、大阪府私立幼稚園連盟・兵庫県私立幼稚園連盟の連絡・懇談会に定期的に参加し、実習及び就職について情報交換を通して連携及び協力に力を入れている。健康栄養学科では、地域住民などを対象に栄養指導を行ったり、近隣市の健康課題に取り組む活動を積極的に取り入れている。

以上、本学では教職課程運営委員会を中心に教職課程の質の保証や改善に取り組み、一定の成果を上げている。また、卒業生や本学が連携する三市の現職教育職従事者に対しても教育・保育専門職のキャリア形成の支援を行い、広く学びの場を提供する取組も行っている。今後も、組織的取り組みを充実させ、教員の不足、質の保証等、昨今の教員養成における課題にどのように向き合い、取り組むべきか、さらなる検証・検討を続けていきたいと考える。

IV. 「教職課程自己点検評価報告書」作成プロセス

- 2021年12月7日 自己点検・評価について情報共有 (2021年度第1回教職課程運営委員会)
- 2022年1月27日 評価報告書の様式について説明 (2021年度第2回教職課程運営委員会)
- 2022年2月22日 全国私立大学教職課程協会からの作成の手引きを配付し、記入フォーム選定の意見交換 (2021年度第3回教職課程運営委員会)
- 2022年3月25日 記入フォームの決定と自己点検の実施間隔について意見交換 (2021年度第4回教職課程運営委員会)
- 2022年5月11日 担当者の役割分担の決定 (2022年度第1回教職課程運営委員会)
- 2022年6月29日 経過報告① 各担当者が長所・特色・課題について説明し、委員による評価及び改善について討議 (2022年度第2回教職課程運営委員会)
- 2022年7月28日 経過報告② 問題点の調整と確認作業 (2022年第3回教職課程運営委員会)
- 2022年10月6日 報告書一次案をもとに、改善すべき点について討議 (2022年度第4回教職課程運営委員会)
- 2022年11月24日 報告書二次案をもとに、改善すべき点について討議 (2022年度第5回教職課程運営委員会)
- 2023年1月19日 完成版の最終点検及び学長報告 (2022年度第6回教職課程運営委員会)
- 2023年2月16日 教授会報告

現状基礎データ票

令和4年5月1日現在

| | | | | | |
|--|-----|-----|-----|---------|---------|
| 設置者：学校法人 大阪青山学園 | | | | | |
| 大学・学部・学科名称：大阪青山大学 子ども教育学部 子ども教育学科 大阪青山大学 健康科学部 健康栄養学科 | | | | | |
| 1 卒業者数、教員免許取得者数、教員採用者数等 | | | | | |
| ① 昨年度卒業者数 子ども教育学科／健康栄養学科 | | | | 78名／51名 | |
| ② ①のうち、就職者数（企業、公務員等を含む） 子ども教育学科／健康栄養学科 | | | | 73名／48名 | |
| ③ ①のうち、教員免許取得者の実数（複数免許取得者も1とする） 子ども教育学科／健康栄養学科 | | | | 72名／3名 | |
| ④ ②のうち、教職に就いた者の数（正規採用＋臨時的任用の合計数） 子ども教育学科／健康栄養学科 | | | | 32名／0名 | |
| ④のうち、正規採用者数 子ども教育学科／健康栄養学科 | | | | 22名／0名 | |
| ④のうち、臨時的任用者数 子ども教育学科／健康栄養学科 | | | | 10名／0名 | |
| 2 教員組織 | | | | | |
| | 教授 | 准教授 | 講師 | 助教 | その他（助手） |
| 教員数 | 26名 | 19名 | 15名 | 10名 | 6名 |
| 相談員・支援員など専門職員数 3名 | | | | | |